

月刊

2019 11 月号

みんぱく

特集

ラグビー という文化



ラグビーが映し出す「世界」 石井昌幸
国民文化となった「ラカヴィ」、経営対象となった「サッカー」 橋本和也
女子ラグビーから見えてきたこと 原英子
ハカ——先祖を歌う炎の呼吸 土井冬樹
オセアニア世界に広がるハカ 丹羽典生

二度目の東京オリンピックピックを前に

後藤 正治

プロフィール
1946年京都府生まれ。ノンフィクション作家。『遠いリング』（講談社）で講談社ノンフィクション賞、『リターンマッチ』（文藝春秋）で大宅壮一ノンフィクション賞、『清冽』で中央公論新社で桑原武夫学芸賞を受賞。近著に『奇蹟の画家』『天人』『拗ね者たらん』すべて講談社など。

君原健二というマラソンランナーには「偉大な」という形容も大仰ではないだろう。オリンピックでは、東京大会（二九六四年）八位、メキシコ（六八年）二位、ミュンヘン（七二年）五位。幾度かインタビュする機会を得たが、東京については、その都度口にした挿話がある。重圧と解放、である。

国を挙げてのオリンピックだった。路上練習で走っていると、すがるような目線と「がんばってください」という声がかかる。自身はもう精一杯がんばっている。これ以上、どうがんばれというのか……。

レース翌日、代々木公園にあった宿舎で目覚めると、いつものように早朝ジョギングに出た。脚は弾み、身体は雲の上を駆けているごとくに軽い。昨日までの重圧が嘘のように消えていた。

君原の時代からいうとおよそ三〇年後、女子マラソンで有森裕子というランナーが現れた。バルセロナ（九二年）二位。テレビ中継を見ていると、レース後、黒いショートカットの女性がスタンドの拍手に応え、満面に笑みを浮かべてトラックを駆けている。ああ、時代は変わったのだと思えて印象的だった。

彼女とは交流を重ね、四年後のアトランタには

現地取材に向かった。三位という結果を残したが、お国のためにがんばるという気持はありますかと尋ねたことがある。「国のためにこんなにしんどいことをするのは嫌」といつて笑ったものだ。走ることを通して何事かを達成したいという。国や所属する組織ではなく、テーマを自身の内面へと向ける新しい世代の人だった。

選手もオリンピックのありようも、随分と変わった。かつて選手たちに過重な重圧を強いたナショナルリズムも薄まった。一方で、オリンピックはアマチュアの大会であつたものが、プロ化とビジネス化が進行した。

時代とともにオリンピックの色調は変わっていくが、有森のいうごとく、「話まるるところ国際運動会」がオリンピックの本質だと私と思う。運動会は、簡素で、シンプルで、楽しいものであればいい。「国」も「ビジネス」も必要ではあるうが、出しやばると余計な夾雑物となる。

二度目の「東京」が近づいていま、大会のありようを原点から見直してみるのも意義があるう。古代ギリシャでも、メダル争いが激化し、優勝者への過剰な報奨金など、カネまみれになったことがオリンピックを衰退させたと思えられているのだから。

12 みんぱく Information

14 想像界の生物相

世界をとらえる怪物キールティムカ
立川 武蔵

16 みんぱく回遊

糸での表現、布への表現
上羽 陽子

18 シネ倶楽部 M

棚田に息づくポリフォニーの歌
——「あまねき旋律」
岡田 恵美

20 ことばの迷い道

迷える森の魔女
石井 晴奈

21 次号予告・編集後記

1 エッセイ 千字文

2 度目の東京オリンピックを前に
後藤 正治

特集 ラグビーという文化

2 ラグビーが映し出す「世界」
石井 昌幸

4 国民文化となった「ラカヴィ」、経営対象となった「サッカー」
橋本 和也

6 女子ラグビーから見えてきたこと
原 英子

8 ハカ——先祖を歌う炎の呼吸
土井 冬樹

9 オセアニア世界に広がるハカ
丹羽 典生

10 ○○してみました世界のフィールド

アマゾンでゴムと格闘する
齋藤 晃

月刊

みんぱく

11月号日次

特集

ラグビーという文化



ラグビーが映し出す「世界」

石井昌幸 早稲田大学教授

ラグビーの日本代表チームには、日本国籍を有しない選手が多数含まれている。なぜだろうか。旧英領を中心に広まったラグビーという競技の世界史は、イングランド、スコットランド、ウェールズ、アイルランドという、イギリス本国の四つの「ネイションズ」による「北」と、南アフリカ、オーストラリア、ニュージーランドを中心とする「南」との対抗軸により展開してきた。のちに、「北」にフランスとイタリアが加わり、「南」にフィジー、サモア、トンガに代表される太平洋島嶼部が加わり、今ではそれに日本、アメリカ、カナダなどが

二〇一九年九月に開幕したラグビーワールドカップ二〇一九日本大会。本特集ではアジアで初となる日本での開催にちなんで、ラグビーをとりあげる。「植民地」とラグビーの意外な関係や、試合前のパフォーマンスから見える各地の文化など、さまざまな切り口からラグビーの世界の奥行きを考えてみたい。

参入して新時代を迎えている。このように、ラグビーの伝播史は、イギリスの「帝国だった過去」と深く結びついている。

国籍主義と協会主義

もともとイギリスには、日本人が考えるような「国籍」という概念がなかった。英国王室の臣民（ブリティッシュ・サブジェクト）は、イギリスで生まれても、植民地で生まれても、法制度上は同じ地位を保証された。だから、例えば一九〇五年に初めてニュージーランド代表が渡英して旋風を巻き起こしたとき、あるいは一九〇六年に南アフリカ代表がロンドンのピッチに立ったとき、両チームの代表選手たちは同じパスポートのもち主だった。

二〇世紀に入るころから、植民地のイギリス系住民たちは頻りに本国に挑戦するようになり、植民地間の対抗戦もすでおこなわれていた。ラグ

ビーの世界的普及はこのようにして始まったのであるが、このとき南半球に住む「イギリス帝国臣民」たちにとっては、各々の植民地ラグビー協会以外に、選手として「代表」すべき帰属先というものはなかったのである。ラグビーの代表制度が、「国籍主義」ではなく、いわば「協会主義」であるのは、このような歴史に由来している。

代表チームとは何か

それではラグビーの代表制度は、たんなる植民地主義の遺制なのであろうか。「ラグビーの日本代表チームには、なぜ外国人選手が含まれているのか」という問題は、裏を返せば、そもそも「代表チーム」とは、誰を、何を代表しているのか、という問題をわたしたちに投げかけている。スポーツの代表選手は、選挙で選ばれるわけでも、すべての国民にかかわる行為をしているわけでもないのだから、蔽密にいうなら「国民を代表している」と

はいえないであろう。彼ら彼女らが「代表」としうるとしたら、まずは、その国や地域の当該競技の協会に加入して登録料を支払っている人たちであり、次にそうした人たちの周囲でそのスポーツにかかわり、支えたり応援したりしている人びと、要するに日本のラグビーなら「日本ラグビー界」ということになるはずだ。だとしたら、むしろラグビーの代表制度の方が、「国籍主義」であるサッカーやオリンピックよりも理にかなっているようにも思える。

もちろん、このような考えに強い違和感を覚える方も多いであろう。例えば高校野球で、他地域出身の選手で占められたチームを地元代表として応援する気になれないのと同じような感情が、代表チームに対しても働くことはじゅうぶん理解できる。これは逆に、一国の代表選手となるために出生地や居住地を捨てて、他国の国籍を取得する「スポーツ移民」への違和感にも通ずる感情であろう。ナシヨナリズムには、政治的・法的な



ラグビーワールドカップ2015 プールB第3戦 日本代表 対 サモア代表
「シヴァ・タウ」を演じるサモア代表に、肩を組んで対峙する日本代表 (提供: 日本ラグビーフットボール協会)

全イングランド
ラグビーチーム来日

9月21日 19:15 対 全早大
9月28日 19:00 対 全日本

入場券前売中
入場料 2,000円
特別指定席 2,000円
中席 A 1,800円
一般 B 1,000円
C 800円
D 500円

1971年に開催された国際親善試合(イングランド 対 全日本)のポスター (提供: 秩父宮記念スポーツ博物館)

1971年に開催された国際親善試合(イングランド 対 全日本)のポスター (提供: 秩父宮記念スポーツ博物館)

原理では片づかない、父祖伝来の土地、母語や方言、食文化、共通の身体的特徴などの、ある種身体化された情緒的ウチノト意識、いわば感情の共同体としての側面があるからだ。そうした感情を、ときにスポーツは強く刺激する。

しかし、このような感情は、日本生まれであるが親が外国出身であったり、日本国籍であるが海外で育ったりといった、多様な背景をもつ選手に対する情緒的な排除を生みかかない。その意味で、ほんらい植民地主義から始まったラグビーの代表制度は、現代では逆説的に、さまざまな出自の人たちが交錯するトランスナショナルな「世界」、そのひとつとしての日本という「場」の姿を代表し表象するものとしての新しい可能性を秘めているのではないかと思うのである。

国民文化となった「ラカヴィ」、 経営対象となった「サッカー」

はしもと かずや
橋本 和也
京都文教大学名誉教授

西洋で発達した近代スポーツは植民地主義戦略のもとで全世界に普及した。その代表としてクリケット、サッカー、ラグビーなどがあげられる。イ



サッカー協会にて、ユースチームのコーチ(中央)と協会役員(右)(スヴァ市、1992年)

ンドやパキスタン、西インド諸島などにおけるクリケット、ブラジルをはじめとする南米におけるサッカー、そしてニュージーランドやオーストラリアをはじめ、サモア、トンガ、フィジーなどの南太平洋におけるラグビーなどは人びとが熱狂する国民的スポーツとなっているだけではなく、国を代表する「国民文化」となっている。

一八七四年に英国の植民地となったフィジーでは、政治体制や宗教のみならず近代スポーツなどの外来の要素が受容され、「ローカル化」を経て「土着化(Indigenization)」されている。キリスト教はフィジー流にローカル化され、現地語での聖書出版と祭礼執行、現地人による教会運営を経て、完全に土着化された。近代スポーツにおいてはクリケットが当初盛んにおこなわれたが、次第に先住系住民は格闘技的要素の強いラグビー(ラカヴィ)を好み、英国の植民地政策で移民してきたインド系住民は身体接触が比較的少ないサッカーを好むようになり、それぞれのやり方で「ローカル化・土着化」させた。競技団体運営にもその民族性の違いが反映されている。

サッカー協会の経営

サッカー協会はインド系住民に担われ、彼らが

協会は単純なインド系民族主義に陥ることなく、先住系選手を積極的に「商品」として扱い、協会のより効率的な「経営」に情熱を注いでいるのである。

フィジー人のラグビー

一方、ラグビーは世界レベルにあり、国を代表するスポーツである。七人制では二〇一六年のリオデジャネイロ・オリンピックで金メダルを獲得している。一見奇妙に思えるが、先住系住民は「ラカヴィとキリスト

教信仰(ロトウ)は同じだ」と語る。キリスト教会

に目を移すと、ここでは「ロトウはヴァヌア(土地の人びとの伝統)とともに歩む」と、キリスト教が土着化され、伝統となったことが語られる。すなわちキリスト教信仰と同一視されるラグビーは、もはや「伝統」と同一視されるほどにフィ



上: アルバートパークでのラグビープレミアリーグ・チームの試合(スヴァ市、2002年)

下: 女子ラグビーチームの練習(スヴァ市、2001年)



フリーキックの練習をするサッカーユースチーム(スヴァ市、1992年)

ジーに「土着」のものとなり、先住系住民のアイデンティティを支える基盤となっているのである。一九九九年ワールドカップでフィジーを一九八七年以来のベスト8に導いたコーチ、B・ジョンストン氏は、地道なスクラムの強化よりも、ボールをもって走ることに喜びを感じるフィジー人ラガーの特徴を看破して、選手を存分に走らせる「ランニング・ラグビー」戦術を考案することを自らに課したという。すなわち「土着化」した特徴をチームが十分に発揮したときに、フィジー人気質を反映したラグビー・スタイルを国民が喜び、その喜びに力を得たプレイヤーがさらに力を発揮する。人びとが喜びを感じるプレイスタイルは民族のパッションを刺激し、選手を高揚させ、スポーツを「国民文化」へと変容させるのである。



ラグビーの試合終了後に伝統的ヤンゴナ贈呈儀式が執行された(アウエイのグラウンドで、1996年)

女子ラグビーから見えてきたこと

原 英子 岩手県立大学教授

女子ラグビーワールドカップ

二〇一九年に日本で開催されたラグビーワールドカップ（RWC）は男子五人制の大会で、一八七七年に第一回大会が開催された。これには女子の大会もある（WRWC）。最初は一九九一年にウエー



男女が一緒にタグラグビーを練習している、のみこまラグビースクール（石川県）の練習風景。タグラグビーとは安全性を重視した、小学生や初心者でおこなわれているラグビーで、タックルの代わりに腰につけたタグをとる（2017年）

ルズで開催された。同じフットボールという名のラグビーとサッカーを比べると、サッカーのワールドカップ第一回大会は、男子が一九三〇年に、女子が一九九一年に開催された。開始時期は男子で五七年の差があるが、女子は同年に始まっている。これに見るように、女子スポーツのひとつの大きな変化は一九九〇年代前後に起こっている。

オリンピックと女子スポーツ

女子スポーツに変化を促したのは一九九一年の国際オリンピック委員会（IOC）で、オリンピックへの新スポーツの導入には男女の競技を取り入れるという決定がなされたことであった。競技種目の男女差をなくす動きにより、今では当たり前になっていくが、バドミントンや柔道は一九九二年、サッカーは一九九六年、レスリングは二〇〇四年に女子競技が導入された。

ラグビーは男女とも二〇一六年に七人制が導入されたが、その決定は二〇一〇年だった。これを機に日本の各都道府県のラグビー協会では、女子メンバーを募った。募集にテレビコマercialを作った地域もあった。最初、特に地方ではメンバーの

にはイングランドで組織化された。トゥイッケナムのワールド・ラグビー博物館によると、このころすでに女子もラグビーをしていたという。一八八一年には女子のイングランドとスコットランド戦がおこなわれたが、女子のユニオンは一九八三年になってやっとできた。男女ともに世界最強のニュージーランドでは男子のユニオンが一九九二年に誕生。

このころすでに女子もラグビーをしていたようだが、女子の組織は一九八九年まで待たなければならなかった。つまり、一九世紀後半には女子も世界的にラグビー競技をしていたが、国家にオーソライズされた組織化は二〇世紀後半までおこなわれなかったのである。

英国ラグビー校出身のトマス・ヒューズの小説『トム・ブラウンの学校生活』（一八五七年）に初期のラグビー競技の様子が描かれている。当時のパブリック・スクールは男子校。そこで生徒たちは賢さ、勇敢さ、つながり、役割といったものをラグビーから学び、ジェントルマンになっていく。これは例えば初期のテニスや上流階級の社交のひとつとして、男女がミックスでおこなっていたスポーツとは異なる背景をもつ。オリンピックに女子が初登場したのは一九〇〇年のパリ大会。このときテニス競技の女子種目では、シングルスと男女のミックスがおこなわれた。女子のオリンピック種目は他に、一九二二年ストックホルム大会からの水泳、一九二八年アムステルダム大会からの陸上など、個人を主体とした競技に見られた。

現状

近年、日本国内でも女子ラグビー部をもつ高校や大学が増えた。世界的にも女子ラグビー選手は増加している。しかし身近な地域でチームを作ろうとすると、団体球技ゆえにメンバーを確保するのが難しいという現実がぶつかる。ラグビースクールに通う少女たちが地元でラグビーを続けよう



ラグビー・イングランド代表のホームスタジアムであるトゥイッケナム・スタジアム（2013年）

数をそろえるのに苦労したという。オリンピック出場の夢を娘に託す元ラグーマンの父親の姿もあった。男子がヨーロッパ強豪であるルーマニアでも、女子メンバーを集めるのに苦労したという話を聞いた。女子チームは一九八〇年代には日本でも作られていたが、オリンピックを見据えて全国に女子チームを普及させるのは容易ではなかったのである。

歴史と組織化

ラグビーは一八二〇年代に英国のパブリック・スクール、ラグビー校で始まったとされ、一八七一年



ウェールズの首都カーディフにあるミレニアム・スタジアム（2015年）

するとき、進学先に女子ラグビー部がないという問題がある。少子化の影響もあり、そもそも団体球技はチームを作るのが困難になっている。独立チームがなく、男子部員のなかで一人がんばる女子もいる。ナショナルチームは作られているが、ラグビーが女子の身近なスポーツとなるにはいまだ壁がある。

男子選手が国境を越えグローバルな移動を特徴とするのに対し、女子はナショナルチームやその下部組織が主体となって選手を確保している段階である。



ラグビーワールドカップ・セブンス2018 チャレンジトーナメント準決勝 日本代表対フィジー代表（提供：日本ラグビーフットボール協会）

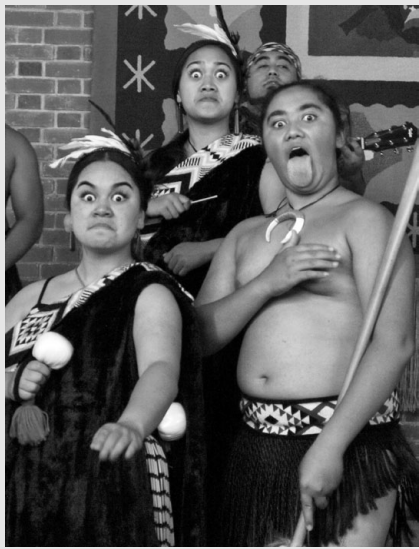
ハカ——先祖を歌う炎の呼吸

土井冬樹
神戸大学大学院博士後期課程

「コ・テ・ファカアリキ！ コ・テ・ファカアリキ！
（侵略軍だ！ 侵略軍が来たぞー）」

力強い声。唸る大地。カッと見開かれた目。お前を食ってやるぞと言わんばかりに突き出された舌。ニュージーランドの先住民マオリに伝わるハカは、とてもパワフルな踊りだ。ハは呼吸、カは炎を意味する。そのふたつが合わさって踊りという意味になる。

冒頭にあるのは、ニュージーランド北島の都市、ロトルア周辺を領土とするテ・アラワの人びとに伝わるハカである。ハカは歌いながら踊るのが基本だ。すべての踊りに歌詞がある。文字をもっていなかったマオリたちにとって、歌や踊りは歴史を語りつなぐ手段のひとつだった。そのため、歌詞の内容は先祖や土地、歴史であることが多い。もちろん、



目を見開くマオリの男女。男性は舌を突き出し、女性は口を開く（2019年）

先祖が違えば歌も違う。マオリはひとつの民族だが、そのなかに一〇〇を超す部族集団がある。それぞれの部族集団が別々の先祖をもっているから、少なくとも一〇〇以上のハカがあることになる。

オールブラックス

ラグビーのニュージーランド代表オールブラックスが踊ることでも有名となった「カ・マテ！ カ・マテ！」のハカは、ニュージーランドの首都ウェリントン周辺の領土とするマオリの部族の踊りだ。敵に追われた首長が穴のなかに隠れて、「カ・マテ（死ぬかもしれない）」と思っている場面からはじまり、無事に生きて穴から這い出し、太陽の光を浴びた喜びを表現している。なぜこの踊りをオールブラックスが演じるようになったのかはよくわかっていないが、一九〇五年から踊り続けられてきた。二〇〇五年になると、オールブラックスはチーム専用、カパ・オ・パンゴ（黒の集団・オールブラックス）とよばれるハカを演じるようになった。

踊りと精神

ハカはよく相手を威嚇する戦いの踊りと説明されるが、オールブラックスが演じるハカはじつはそうではない。武器をもたずに踊るハカは、ハカ・タパラヒとよばれる儀式的なものなのだ。なにか大切なことをする前に、精神的・身体的な準備をする

オセアニア世界に広がるハカ

丹羽典生
民博 学術資源開発センター

オセアニアの人びとは、概して相当なラグビー狂だと思ふ。試合となると、はじまる前からラグビーの話でもちきりとなり、とても調査にならない。わたしとの会話に困ったのであろう高齢の女性が、話の糸口にとラグビーマッチでの日本人の



オーストラリアのラグビーリーグにおけるインディジニアス・オールスターズのパフォーマンス（2017年、提供：EPA=時事）

活躍を熱心に話してくれたこともあった。申し訳ないことに、日本でもテレビはほとんど見ないし、スポーツ観戦も嫌いではないが趣味としていないので、曖昧に相槌を打つことしかできなかった。長期滞在も終わりがけのころ、親しい友人から「お前はフィジーを調査しているんだから、ラグビーにもっと関心をもて！」とはっぱをかけたほどである。彼らからすれば自分たちの文化を調べに来たのに、その核心に関心をもっていないのはけしからんということであろう。

「ハカ」だけではない

その一方でラグビーの試合前に催されるハカには、文化史的な背景を含めて興味をひかれた。ニュージーランドの先住民マオリのそれについてはそれなりに知られているが、現地滞在中に気がついたのは、ハカに類するパフォーマンスが、他のオセアニア地域でも発展していることである。

例えばフィジーのラグビーチームには、ジンビとよばれる試合前のパフォーマンスがあるが、本来戦争後に舞う踊りであるジンビを、試合前に舞うことは適切かどうか、真剣に議論されていた。名称はボレに変更されたという報道があったが、ラグビーのリーグごとで対応がまちまちのようで、今でもジンビということばは一般的な用語として使われている。最近ではさらに議論が混乱し、



ザ・ラグビーチャンピオンシップ2018で「カ・マテ」のハカを演じるオールブラックス（提供：AFP=時事）

ために踊られる。自分の精神を魂とつなぎ合わせ、目を、手を、動きをとおして解き放つ。そのためこの踊りだという。実際、ハカを踊ることによって心がリラックスし、一方で身体組織が活性化することによって複数の学者が報告している。マオリの慣習は西洋科学においても的確さを明示した。ラグビーにおいてハカは、自分を鼓舞し、試合のパフォーマンスを向上させる武器になる。

最近では、女子ラグビーを含むニュージーランド国内のラグビーチームのほとんどが自分たちのハカをもつようになってきている。試合のパフォーマンスを上げるためばかりではないだろう。真剣にハカを演じるラグビープレイヤーたちからは、マオリ文化への愛と敬意が感じられる。

場合によってはジンビではなく聖書や讃美歌の一節を唱えることが提唱されてもいる。ほとんどがキリスト教徒であるフィジー人にとって、ことに伝統文化自体をも問い直すペンテコステ系の信者が近年増えていることもあり、キリスト教受容以前の戦争の文化を流用することに戸惑いや抵抗を感じる人もいるのであろう。

他のオセアニア地域ではどうかとインターネットで検索してみると、サモア、トンガのナショナルチームには、それぞれシヴァ・タウ、シビ・タウがあり、ラバヌイ（イースター島）にはホコがあるという。サモアやトンガのそれは、フィジーのジンビと同様に試合前の演舞にふさわしい形に徐々に変化してきているようでもある。フィジーのような問題が起きているのか、興味深い点である。

エンターテイメントとしての側面

個人的には、オーストラリアのインディジニアス・オールスターズというチームのハカに目をひかれた。明らかに選手ではない人がオーストラリアのアポリジニのようにボディペインティングをおこない、ブーメランや槍まで抱えて、関の声を上げる。ここまでくると選手や試合を鼓舞するというより、観客のための余興の領域にまで入り込んでいる気がしないでもない。ここで取り上げたのは、オセアニアという地域での話であるが、それを超えた国や地域のチームにもハカ的なパフォーマンスが採用されたり、関心をもたれたりしているのは、こうした見栄えの良さ、余興的な要素があることも関係しているであろう。

〇〇してみました世界のフィールド

アマゾンでゴムと格闘する

さいとう あきら
齋藤 晃

民博 人類文明誌研究部



生ゴムを作ってみました

民博の収蔵庫に保管されるゴムの塊。すっかり乾燥したが、臭いは相変わらず (H0213367、2019年撮影)

かつてアマゾンから世界各地に輸出されたゴム。ゴム作りは重労働をとめない、完成してもなおその扱いには苦勞する。アマゾンで作られたゴムが民博の収蔵庫に収まるまでの過程を振り返りつつ、ゴム作りについて紹介する。



ポリビア
リベラルタ

南米ポリビアのアマゾン北東部は、かつて天然ゴムの産地として知られていた。一九世紀の産業革命以降、ゴムはベルトやホース、タイヤなどの原料として使われ始め、需要が飛躍的に伸びた。良質のゴムをもたらずバラゴムノキはアマゾン川流域にしか生育しておらず、それゆえヨーロッパの事業家はこぞって熱帯雨林の開発に乗り出した。河川の交通網が整備され、町が建設され、大勢の入植者がゴムノキを求めて密林にわけ入った。先住民は安価な労働力として駆り出されるか、邪魔者として排除された。ゴムブームとして知られるこの狂騒は、二〇世紀初めに東南アジアのプランテーションで生産された安価なゴムがアマゾンのゴムを世界市場から駆逐するまで続いた。



リベラルタの町から望むマモレ川。かつてゴムは河川を利用してヨーロッパへ運ばれた (本文中の写真はすべて 1998年撮影)

ポリビア・アマゾンフィールドとしていたわたしは、一時期この出来事に関心をもち、地元の人から昔話を聞いたり、図書館や文書館で古い記録をあさったりしたことがあった。しかし、天然ゴムの特性や生産方法について無知だったため、今ひとつ理解がおぼつかなかった。そこで、天然ゴムの生産現場を実際に取材してみようと思いついた。一九九八年夏のことである。

ゴムの採取と加工

ブラジルとの国境に近いリベラルタの町は、アマゾン川本流に連なるふたつの川の交差点に位置しており、かつてポリビアのゴム産業の要所として栄えた。この町にはバラゴムノキの試験的プランテーションがあり、わたしはそのスタッフの協力を得て、天然ゴムの採取と加工を試みることにした。

最初の作業はゴムノキからラテックスというゴム質を含む乳液を採取することである。手斧のような道具で木の幹に斜めに切り込みを入れると、乳白色の液体が流れ出すので、それを幹に固定した容器に受け止める。複数の木に対してこの作業をおこない、数時間後、容器にたまった乳液を回収する。この乳液に酸を加えるとゴム質が分離され、生ゴムが得られるが、わたしは煙に燻して固めるといふむかしの方法を試してみた。半地下式の炉で薪を燃やし、立ち上る煙の上に横木を渡し、その横木の中央部に乳液を注いでいく。煙にさらされた乳液は横木に付着して凝固し、やがて大きな塊になっていく。最終的にポラチャとよばれる生ゴムの塊が作られる。



乳液の燻蒸作業。作業を開始してから3日目

ゴムの塊は横木に付着して凝固し、やがて大きな塊になっていく。最終的にポラチャとよばれる生ゴムの塊が作られる。ゴムの塊は横木の燻蒸作業は時間と体力を要する。わたしは四日間かけて五〇キログラムほどのポラチャを作ったが、かつての輸用にはその倍の大きさのものが作られたという。均等な円筒形になるよう、絶えず棒を回転させなければならぬが、塊が大



バラゴムノキの幹から流れ出す乳液を採取する

きくなるにつれ、重量も増すため、作業はどんどんきつくなる。一日中棒を回していると、腕がまさに棒のようになる。

ゴムの塊は乾期のあいだ熱帯雨林のなかの仮小屋で生活し、天然ゴムの採取と加工に明け暮れた。彼らは密林に散在するゴムノキを二日一回巡回し、幹に切り込みを入れる作業と乳液を回収する作業を繰り返した。乳液の回収後は、その燻蒸作業も欠かせなかった。労働者の多くは、ゴム業者の借金奴隷と化し、マリアアがはびこる不衛生な環境で、なかば強制的に過酷な労働に従事させられた。その苦難は想像を絶する。

ポリビアから日本へ

リベラルタの試験場で作ったポラチャは、ゴムの採取や加工の道具と一緒になり、研究資料として日本にもち帰ることにした。しかし、その扱いには苦勞させられた。まず、生ゴムの塊はとてむかしの方法を試してみた。半地下式の炉で薪を燃やし、立ち上る煙の上に横木を渡し、その横木の中央部に乳液を注いでいく。煙にさらされた乳液は横木に付着して凝固し、やがて大きな塊になっていく。最終的にポラチャとよばれる生ゴムの塊が作られる。ゴムの塊は横木の燻蒸作業は時間と体力を要する。わたしは四日間かけて五〇キログラムほどのポラチャを作ったが、かつての輸用にはその倍の大きさのものが作られたという。均等な円筒形になるよう、絶えず棒を回転させなければならぬが、塊が大

特別展

「驚異と怪異——想像界の生きものたち」
なぜ人類は、この世のキワにいるか。もしも
ない不思議な生きものを思い描き、形にし
てきたのか？ 奇妙で怪しい、不気味だけ
どかわい、世界の靈獣・幻獣・怪獣が大
集合！ 現代のアーティスト・漫画家・ゲー
ムデザイナーたちによるクリエーター制作
も紹介し、妖怪やモンスターの源泉にある
想像と創造の力を探ります。

会期 11月26日(火)まで
会場 特別展示館



トッピラク
(グリーンランド)

■関連イベント
みんなく映画会 第46回みんなくワールドシネマ
「ワンダーストラック」

異なった時代を生きる少年と少女が、数々の
困難を乗り越えて、ニューヨークの自然
史博物館で驚きと幸せの一撃に出会い、
運命に導かれていく姿を描いたアメリカ映
画。美しい映像世界の中で、博物館の始ま
りについて考えたいと思います。

日時 11月9日(土) 13時30分～16時
(開場13時)
会場 本館セミナー室
司会・解説 山中由里子(本館教授)
※メイン会場が満席の場合は中継会場をご
案内します。
※申込不要、要展示
観覧券(定員先着
200名)
※参加券を11時から
インフォメーション
前(本館1階)にて
配布します。



PHOTO: Mary Cybulski

企画展

「アルテ・ポプラー
—メキシコの造形表現のいま—」

メキシコでは、職人や一般の人びとによる
素材でもしうい造形表現をアルテ・ポプ
ラーと呼びます。先住民族の仮面と毛糸織
地域色豊かな陶器、都市の街路にあふれる
骸骨人形や、生命の木といわれる焼き物の
オブジェなど、現代のアルテ・ポプラーの
姿を紹介いたします。

会期 12月24日(火)まで
会場 本館企画展示場



生命の木

■関連イベント

ギャラリートーク
日時 11月7日(木)、11月21日(木)、
12月5日(木)、14時
場所 本館企画展示場
講師 鈴木紀(本館教授)
※申込不要 参加無料(要展示観覧券)

みんなく無料シャトルバスのご案内
大阪モノレール「万博記念公園駅」とみんなくの間の直
通送迎バスを特別展「驚異と怪異」の会期中に運行しま
す。

みんなくセミナー

日時 11月16日(土) 13時30分～15時(開場13時)
会場 本館くろぎスペース(地下1階)
※申込不要 参加無料(定員先着160名)
第497回

ルーマニア近代の知識人と民衆
——民族主義、正教信仰、社会主義のなかで——
講師 新免光比呂
(本館 准教授)

西欧化した知識人と前
近代的な農民社会を特
徴とする20世紀のルーマ
ニアでは、人ひとが民族
主義、社会主義を厚い正
教信仰をもって経験しま
した。そんな激動の時代
を振り返ってみます。



伝統的な木造教会でミサをあげる人びと

みんなくウィークエンド・サロン
研究者と話そう

本館の研究者が「現在取り組んでいる研究」「調査し
ている地域/国の最新情報」「みんなくでの展示資料」
について分かりやすくお話しします。

11月3日(日) 祝 14時30分～15時15分 本館ナビひろば
ラテンアメリカのアルテ・ポプラー
話者 鈴木紀(本館教授)

11月10日(日) 14時30分～15時 本館ナビひろば
「旧世界」の驚異
——キリスト教宣教とアメリカ先住民
話者 齋藤晃(本館教授)

※申込不要、参加無料(要展示観覧券)

※各イベントについてくわしくは みんなくホームページ
をご覧ください。

※電話でのお問い合わせの受付時間は、9時～17時(土日祝
を除く)です。

本館に所蔵されているアイヌの標本資料への
感謝と安全を願い、北海道アイヌ協会の
協力をえて、カムイノミをおこないます。
日時 11月28日(木) 10時30分～11時50分
会場 本館玄関前広場(雨天の場合、古式
舞踊は本館1階エントランスホール
にて実施)

※見学可能、申込不要

アイヌ工芸inみんなく

アイヌ民族が培ってきたもの作りの技術や知
恵、伝統から創造された数々の作品にふれ
てみませんか。工芸家による実演や解説が行
われます。また、刺しゅうや木彫などの体験
ができます。

日時 11月28日(木)～12月1日(日)
会場 本館1階エントランスホール

国立民族学博物館コレクション
世界のかわいい衣装

本館が所蔵するコレクションのなかから、「か
わい」をキーワードに選んだ、1920年
代から現在までの衣装約120点を紹介し
ます。これらを身につける人びとの世界に思
いを馳せることは、私たちの装いについても
問い直す機会となるでしょう。

日時 11月13日(水)～25日(月)

日～木曜日：10時～20時
金・土曜日：10時～21時

(入場は閉場30分前まで)
(催し最終日は18時閉場)

会場 阪急うめだ本店9階
阪急うめだギャラリー

入場料(税込) 一般600円、学生400円、
小学生以下無料

※小学生以下のご入場は保護者の同伴が必
要です。

主催 阪急うめだ本店、国立民族学博物館、
千里文化財団

北大阪ミュージアムメッセ

北大阪8市3町の美術館、博物館が2日間み
んばくに大集結し、さまざまなワークショップ

フヤ、地域の民俗芸能上演などを実施します。
日時 11月16日(土)、17日(日) 10時～16時
会場 本館1階エントランスホール及び
特別展示館 地下休憩所
※申込不要、参加無料(当日は無料観覧日
です)

主催 北大阪ミュージアム・ネットワーク

公開講演会

「アニメ聖地巡礼
——サブカルチャー遺産の現在——」

日本では、地域と強く結びついたアニメを
観光資源に用いることを「聖地巡礼」とよび
ます。この講演会では、文化や文化遺産の
問題を地域の問題として考えてきた人類学
者・民俗学者が、聖地観光の意味を考えます。
日時 11月15日(金) 18時30分～20時40分
(開場17時30分)

会場 日経ホール(東京)
講演 川村清志(国立歴史民俗博物館准教授)
河合洋尚(本館 准教授)

飯田卓(本館 教授)

主催 国立民族学博物館、日本経済新聞社

※要事前申込(定員600名)、
参加無料(参加証が必要)、
手話通訳あり

お問い合わせ先
研究協力課
06-6878-8209

世界とつながる トーナメントをカナダの
アーティストと造ろう

クラウドファンディングはじめます

みんなくは、まもなく創設50周年を迎えま
す。これを機に、現在のトーナメントは
そのままに、次の時代のみんばくの象徴と
して、もう一本のトーナメントを制作し
たいと考えました。クラウドファンディ
ングをおした、みなさまの温かいご支援
ご協力をお願いいたします。

期間 10月28日(月)9時～12月26日(木)23時
目標金額 300万円

友の会講演会

会場 本館第5セミナー室(当日先着順・定員96名)
※会員無料(会員証提示)、一般5000円

第495回 12月7日(土) 13時30分～14時40分
みんなく名教授シリーズ

聖なるもの 俗なるもの

講師 立川武蔵(本館 名誉教授)

「宗教」と呼ばれているものにはさまざまな儀礼や実践が
見られます。定められた日に各地方の祭りがあつちし、
彼岸には人びとは祖先供養のため寺や墓地を訪れます。
葬儀や法事には宗教的要素が強く見られます。一方、個々
人の精神的救済のためには坐禅、念仏などがおこなわれ
ています。これらさまざまな現象を聖なるもの、俗なる
もの、浄なるもの、不浄なるものなどの基本概念によつ
て統一的に捉えることを目指します。

第496回 2020年1月11日(土) 13時30分～14時40分
中国に生きるムスリムたち

講師 奈良雅史(本館 准教授)

※講演会終了後、講師を囲んで懇談会をおこないます(40分)。

東京講演会

会場 モンベル御徒町店4Fサロン
(申込先着順・定員60名)

※要事前申込、会員無料(会員証提示)、一般5000円
第128回 2020年1月25日(土) 13時30分～14時40分
消滅の危機に瀕した言語

講師 吉岡乾(本館 准教授)

※講演会終了後、講師を囲んで懇談会をおこないます(40分)。

阪急生活学校 連携事業 講演会

「イタリア人と食——生活を楽しむために」

講師 宇田川妙子(本館 教授)

日時 12月11日(水) 14時～15時30分
会場 阪急うめだホール(大阪) 阪急うめだ本店9階
主催 千里文化財団、阪急うめだ本店
協力 国立民族学博物館

※要事前申込、会員無料(会員証提示)、一般10000円

友の会

国立民族学博物館友の会 電話 06-6877-8893 (9時～17時、土日祝を除く) FAX 06-6878-3716
https://www.senri-f.or.jp/minpaku_associates/ E-mail minpaku@senri-f.or.jp



想像界の生物相

世界をとらえる怪物キールティムカ

民博 名誉教授 立川 武蔵
たちかわ むさし



資料名 | 占術ダイアグラム

標本番号 | H0080049

地域 | ネパール

サイズ | 縦 55cm × 横 38cm (写真は部分)

備考 | 特別展「驚異と怪異——想像界の生きものたち」で展示中 (11月26日まで)

◆◆◆ 輪廻図の無常大鬼 ◆◆◆

ネパールやチベットさらには中国や日本でもよく見られる輪廻図では、鬼らしきものが「輪廻の輪」を啜え、両手で輪の端をつかんでいる。この様からは怪物が輪廻する世界をとらえる、あるいは監視しているように見える。今日、一般に見ることのできる輪廻図では、輪廻の輪の下に両足も描かれているが、元来はこの怪物に足はなかったようだ。この鬼らしきものは中国、日本では「無常大鬼」とよばれてきた。この命名はかの怪物がこの娑婆世界の無常性を見せつけていると解釈された結果であろう。

無常大鬼は、サンスクリット語で「キールティ・ムカ」(誉れの顔)という。この怪物のイメージはヒンドゥー教および仏教の造形世界において二五〇〇年以上にわたってネパール、チベット、中国、日本、東南アジア諸国の地域に見られる。東南アジア諸国ではこの怪物は「カーラ」(時間あるいは死神)とよばれている。

◆◆◆ キールティムカの起源 ◆◆◆

キールティムカのイメージにはふたつ

の源が考えられる。第一は古代シリアなどの儀礼用の香油容器である。シリア北部、ヨルダン、イラン北部などでは頭部のみの獅子が丸い容器の縁を啜え、両手で容器をつかんでいるといった石製の儀礼用杯が約三〇〇点発見されている。このような獅子頭付き円形儀礼容器の制作年代は、紀元前九、八世紀まで遡ることができ、獅子の口の下には小さな穴があり、この穴から儀礼用の香油が流し込まれたと思われる。かの円形の杯を両手で握る獅子のイメージは、輪廻の輪をおさえる無常大鬼のそれとよく似ている。両者のイメージの酷似性は偶然とは思えない。

アジャンタ第一七石窟に紀元六世紀ごろの輪廻図が残っているが、これはインドに現存する最古の輪廻図と思われる。このような輪廻図の文献的典拠は、部派仏教の一派である根本説一切有部派の『根本説一切有部毘奈耶』にある。僧侶たちの行為に関する罰則を主として述べた、この「律」文献の漢訳はかなり遅く、八世紀の初めに唐の僧侶義浄により訳された。

一方、日本の胎藏曼陀ラに見られる門に描かれた無常大鬼は、アーチ型の梁の下に両手をさし入れて梁を支えもっているようであり、これは輪廻世界を「とらえている」無常大鬼と異なるイメージである。

キールティムカのイメージの第二の源は古代ギリシア神話のメドゥーサである。魔女メドゥーサは首を切り落とされた後も見るものを石に変えてしまう魔力があると信じられていた。アレキサンダー大王の鎧の胸にはメドゥーサの首が見られるが、ヒンドゥー教の神ヴィシュヌの腕や毘沙門天のベルトにもあらわれる。これはやがて鬼瓦の「顔」になるのである。

このようにはじめは頭のみであった怪物にやがて両足が生え、アジア全域に住みつき、天あるいは空から生類を見守ってきた。われわれの世界はこの怪物が口から吹き出したものともいわれている。

※本稿は特別展図録『驚異と怪異——想像界の生きものたち』に掲載されたコラムに加筆・修正したものです。

糸での表現、布への表現

民博 人類文明誌研究部 上羽 陽子



両面木版捺染布の染色作業(インド、グジャラート州カッチ地方、2013年)

ほうが特殊である。世界の布を見てみると、織物による文様表現が、染物による文様表現に比べて、より広い地域で見られるのはそのためだ。例えば、古くヨーロッパでは、糸を染めてから織る技術はあったが、布地を染める技術がなかったため、染物はインドや西アジアからの輸入品にたよっていた。

世界を魅了したインドの木版捺染布

そのような技術を用いている染物のひとつに南アジア展示場の「両面木版捺染布(アジュラク)」がある。インドの木版捺染布は、洗濯しても色落ちしない堅牢で鮮やかな多色染め

南アジア展示「染織の伝統と現代」セクション

両面木版捺染布(アジュラク)。インド西部カッチ地方の男性が下衣や肩掛け、ターバンなどとして着用する(インド、H0275743他)



アメリカ展示「着る」セクション



(本館展示場)

観覧券売場

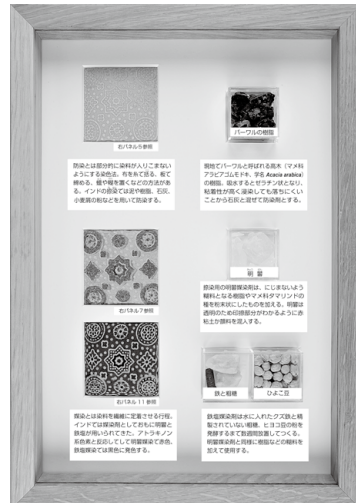
中国地域の文化展示「装い」セクション



織り、染め、刺繍などさまざまな染織技術によってつくられる中国各地の衣装(H0237297他)



織機。文様部分は縫取織の技法を用いている。手間をかけて少しずつ別糸の色を変えることで、多彩な文様表現がされている(メキシコ、H0131890)



染織技術解説パネル。南アジアの染めや織り、刺繍などの技術的特徴を、現地の布や染料、実物模型などで紹介している

によってつくられている。この捺染布は、一七世紀後半のヨーロッパに「インド更紗」ブームを巻き起こし、さらには世界各地で人気を博してきた。

このような技術を支えてきた染め職人による複雑な製作工程は、同じ南アジア展示場にある「染織技術解説パネル」で紹介されている。使用される複数の染料だけではなく、マメ科アラビアゴムモドキ(*Acacia arabica*)の樹脂による防染剤や、布地への染色性を高めるための下染めに用いるシクンシ科のミロバラン(*Terminalia chebula*)の実などの実物も展示されている。多様な材料と染め技術を巧みに利用しながら、文様表現がされていることがわかる。

現在、わたしたちは、衣装に色や文様があるのは当たり前のように思っている。それは工業化により布地の大量生産が可能となり、容易に色や模様をほどこすことができるプリント

本館展示場では、世界各地でつくられた多様な衣装を見ることができ、それぞれの衣装の文様を見てみると織り技術によるものと、染め技術によるものがある。例えば、アメリカ展示場に入ると、織り途中の「腰機」が展示されている。ここでは縫取織という織技術によって、色とりどりの人物や鳥などが表現されている。

織物と染物

この縫取織とは、その名の通り、糸で縫っているかのように文様が見える織技術の一種である。タテ糸とヨコ糸との交わりによる地組織に、別糸をヨコ方向に織り込んでいく。このような地組織に別糸を追加して文様をあらわす技法には、紋織とよばれるものもある。紋織は別糸を織幅、もしくは一定の幅で往復させる。一方、縫取織は別糸を文様部分のみで往復させることが特徴である。そのため、文様ごとに織糸の色を変えることができ、多彩な表現が可能としている。

布への文様表現は、このように先に染めた糸を用いて織技術で表現しているもの(縞織、格子織、紋織、縫取織、拵織など)と、布を織ってから染め技術で表現しているもの(絞染、ろうけつ染、型染、捺染など)とに区別することができる。前者を「織物」、後者を「染物」とよんでいる。一般的に糸を染める技術よりも、織りあがった布地に色や文様を染める技術の

技術が発達したためである。

世界の衣装が大集合

今秋、みんぱく収蔵の世界の衣装が大集合する。一月二日から二五日まで阪急うめだギャラリーで開催される「国立民族学博物館コレクション 世界のかわいい衣装」展では、みんぱくのコレクションのなかから「かわいい」をキーワードに選んだ、一九二〇年代から現在までの衣装百二十一点を紹介する。世界各地で育まれてきた独特な文様、鮮やかな色彩、形、またそれらを生み出す、織り、染め、刺繍などの手仕事を見ることができ、それぞれの衣装が、どのような技術を用いて文様表現されているか、ぜひ、間近で見ていただきたい。

「国立民族学博物館コレクション 世界のかわいい衣装」については本誌表紙裏、二頁でも紹介しています。



棚田に息づくポリフォニーの歌

岡田 恵美
琉球大学准教授

歌と労働をテーマにしたドキュメンタリー

本作は、南インド出身の監督による、インド北東部の農村に息づく歌の文化を描いたドキュメンタリー映画である。丘陵に広がる棚田を舞台に、草刈りから米の収穫・脱穀まで季節の移ろいとともに、協働作業の仲間内から自然と生まれる数々の歌声を、六年もの歳月をかけて撮影している。農作業から歌が発生する場面は定点から長回しでありのままに記録され、村人同士の会話をとおして、彼らの内なる想いや苦難の歴史が垣間見られる。編集による演出が極力抑えられているため、臨場感に溢れ



歌いながら協働して田を耕す村人たち
©the u-ra-mi-li project

響き渡る歌声と日常に生きる労働歌の存在に、誰もが静かな感動と郷愁をよび起こされるのではないか。本作は山形国際ドキュメンタリー映画祭をはじめ、世界各国の映画祭で上映された。

民族音楽学的な見地からも、労働歌が本来の脈絡のなかで現存する稀少な事例であり、単旋律の民謡が主流の南アジア世界において、このポリフォニー（多声的合唱）の歌文化は注目し値する。

チャケサン・ナガと民謡「リ」

本作に登場するのは、モンゴロイド系の山岳民族チャケサン・ナガの村人たちである。ミャンマーとの国境に近いインド北東部ナガランド州南部のペクに暮らし、チョークリ語を母語とする。かつては首狩りの慣習もあったが、現在は一九七〇年代以降にバプテスト（プロテスタントの一派）に改宗したキリスト教徒が大半である。大

国インドのなかで民族的・言語的・宗教的にマイノリティの彼らは、インド憲法に基づき、保護措置の対象となっているトライブ（指定部族）に認定されている。標高一五〇メートルを超えた村で暮らす人びとの多くは、「ムレ」とよばれる小集団で農作業をおこない、機械は用いずすべて人力である。重労働のあいだでも、一人が作業のリズムに合わせて歌い始めれば、各々が異なる声部（パート）で響きを作りながら声を重ねて呼応する。原題のチョークリ語「コキバル（上へ下へ斜め）」は、紡ぎ出される豊かな旋律や和声の動きを示し、彼らにとってともに歌うことは疲労回復や作業の効率化以上に、

「あまねき旋律」

原題：Kho Ki Pa Lü

2017年/インド/チョークリ語・英語/83分

監督：アマシュカ・ミーナークシ、イーシュワル・シュリクマール

2019年12月のみんぱく映画会にて上映予定



収穫を終えた金色の棚田と初穀を飛ばす
チャケサン・ナガの女性
©the u-ra-mi-li project

仲間との連帯感や生きるうえで必要な相互扶助の関係を維持する媒介となっている。

作品中では彼らの歌に関して詳細な説明はない。情報を補足すれば、チョークリ語の歌は「リ」とよばれ、歌詞は上句四音節、下句五音節の定型詩である。隠喩を用いた恋愛歌や友情の歌、英雄歌、戦いの叙事歌など、無文字社会であった彼らにとって、リは祖先や村の歴史・伝説を後世に伝承する役割も担ってきた。村人が集まるとすぐにリが始まり、瓢箪に豚の腸を張った一絃琴「タテイ」を伴奏楽器として、複数の声部によるポリフォニーがヴィブラートを装飾的に用いながら歌われる。本作のなかに登場する、リを象徴する詩句がある。

「ネヒモゾ ハヌディソレ
（あなたがいないとわたしには何もなし）」

これは、愛する人へのことば、また仲間がいれば飢えることはないという相互扶助を示すことばであると同時に、歌は一人では歌えない、ともに声を重ねてこそ幸せが訪れるのだ、という意味が包含される。

歌の伝承の過去・現在・未来
チャケサン・ナガは、歴史的には苦難の連続であった。一九四四年のインパ



一絃琴タテイをもつチャケサン・ナガの少女 (2015年)

ル作戦ではその村々が日本軍の進軍経路となり、戦後はインドからの分離独立闘争が半世紀以上も続いた。インド軍との武力闘争では村人も参戦し、約七五パーセントの村が焼き払われたという。またキリスト教の波及によって、村人が一堂に集まる日曜礼拝では賛美歌やゴスペルが歌われるようになり、伝統的風習や文化の伝承場所であった「モラン（若者宿）」は消滅し、次世代へのリ

の伝承が危機的となった村も少なくなかった。二〇〇〇年代に入ると、ナガランド州政府は過去の紛争地域というイメージを払拭すべく、地域振興政策として伝統的風習や芸能の観光資源化を促進させている。村単位で参加する州政府主催のホーンビル芸能祭は毎年開催され、若年層に対して自文化への関心や再評価を促す契機にもなっている。本作にも、一二月の村祭り直前、年配者から歌や踊りの指導を受ける若者たちの姿が収められている。歌とともに生きるチャケサン・ナガ、そして棚田に息づくポリフォニーの歌の今後を、静かに見守りたい。

ことばの迷い道

迷える森の魔女

いしい はるな
石井 晴奈

東京外国語大学非常勤講師

「北欧の国・フィンランド」と聞いて思い浮かぶものは何だろうか。サウナ、オーロラ、サンタクロース、ムーミン。「森と湖の国」と称されるフィンランドに、漠然とした憧れを抱く日本人は少なくないと思う。夢あふれるムーミンの国のことは学んでみたい、という人も確実に増えている。

フィンランド語と日本語は発音の近い音が多い。そのため、聞いていると日本語ではないかと思ってしまうような語がたくさんある。カニ(Kani)、トツタカイ(Totta kai)、グルクルパ(Gulklupa)など。誤解のないように付け加えておくが、カニは「ウサギ」、トツタカイは「もちろん」、グルクルパは「通行許可」という意味である。アホ(Aho)、パーヤネン(Paajanen)なんていう苗字も存在する。発音は非常にとっつきやすいフィンランド語だが、一方では「悪魔の言語」ともいわれている。その理由はおもにふたつ。語形変化が複雑であること、そして語彙が英語にほとんど似ておらず、意味の推測がしにくいことだ。

例えば、フィンランド語には日本語の「を」「で」「から」のような助詞に似たものがある。そのような語尾をつけると、原形から大きく変わってしまう語が少なからずあるのだ。筆者がフィンランド語を勉強し始めて間もないころ、文章中に出てきた、アヤンン(äyän)という語の意味を調べるため、辞書を引いた。しかし、いくら探しても出てこない。アヤンンは原形ではなく語尾がついた形で、辞書の見出し語としては載っていないからなのである。語

の意味がわからないから辞書を引いているのに、原形がわからないとその語にすらたどり着けないというもどかしさ。三〇分以上辞書とにらめっこした末に、アヤンンが「時間」を意味する、アイカ(äike)の変化形であり、「時間の」という意味だと気づいたときは、随分と時間の無駄をしたような気がした。

そして、外来語を除く多くの語に関しては、英語の知識がほとんど役に立たない。「犬」は、コイラ(koira)、「ペン」は、キユナ(kyynä)、数字の「1」は、ユクシ(yksi)。文字どおり「から覚えなくてはならないのである(「頭」は、パー(pää)など、たまに語呂合わせしやすいものはあるが)。また、発音が日本語に似ているといっても、当然ながら音の並びはまったく違うので、かえって発音しにくいこともある。次のカタカナを音読してみてほしい。すぐにすらすらといえるだろうか。

オレットテコ テ コトイシン スオメスタ

(Olettaako te kotaisin Suomesta?)

「あなたたちはフィンランドの出身ですか?」という意味である。「呪文を唱えているみたいですね」と、学習者にはよくいわれる。

「森と湖の国」という穏やかなことばとは対照的に、フィンランド語はまさに迷いの森である。その森に魅せられ、迷いながらも奥深くへ進み、森を操る魔女となるべく、呪文を唱えながら修業をする身。例えていえば筆者の現況はこのようなものだろう。

編集後記

ラグビーワールドカップの開催を前にして、ふたつの疑問があった。なぜラグビーではナショナルチームでも選手の国際色が豊かなのかと、イギリスの植民地であったインドでクリケットが熱狂的に受容されたのと対照的に、ラグビーはなぜ根づかなかったのかである。本号の特集を読むと、第一の疑問は簡にして要を得た説明で氷解する。日本ラグビー界を代表するとしか言えない選手を、無意識のうちに国の代表選手とよんでしまうナショナリズムの陥穽かんせい。それは巻頭エッセイの東京オリンピックへの提言とも呼応する。インド研究者に聞いても答えに窮きゆうした第二の疑問も、類推するヒントが得られたようだ。フィジーにおいてラグビーが「国民文化」へと変容した経緯である、喜びや好み、気質といったキーワードである。

旅行ガイドブックは、旅の前や旅先で読むものと思いがちだ。だが、じつは旅を終え訪ねた場所を再確認するために読まれることが少なくないという。確かに、後で読むほうが頭にすっと入ってくる実感がある。残すところ決勝戦というタイミングで発行するラグビー特集。そうした後読みのニーズに応える充実した内容になったのではないかな。

民博のシンボルカラーを決め、シンボルマークやロゴをデザインされたグラフィックデザイナーの勝井三雄かついみつお氏の訃報が届いた。記してご冥福をお祈りする。(南真木人)

次号の予告

特集

「先住民の言語」(仮)

みんぱくをもっと楽しみたい方のために 国立民族学博物館友の会のご案内

友の会は、みんぱくの活動を支援し、博物館を楽しく積極的に活用するためにつくられました。

毎月『月刊みんぱく』をお届けするほか、さまざまなサービスをご用意しております。

維持会員・正会員

『月刊みんぱく』の送付／友の会機関誌『季刊民族学』の送付／本館展示の無料観覧／特別展観覧料の割引／友の会講演会への参加／研究者同行の国内外研修旅行への参加 など

ミュージアム会員

『月刊みんぱく』の送付／本館展示の無料観覧／特別展観覧料の割引／友の会講演会への参加 など

繰り返し入館できる**みんぱくフリーパス**や、学校・学部単位で利用できる**キャンパスメンバーズ**など各種会員種別もご紹介します。目的にあわせてご利用ください。

詳細は、一般財団法人千里文化財団までお問い合わせください。
(電話 06-6877-8893 / 平日9:00～17:00)



月刊みんぱく 2019年11月号

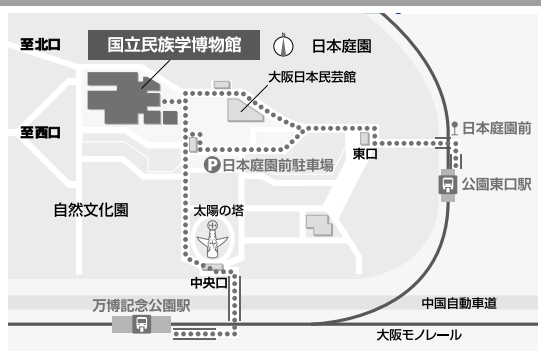
第43巻第11号通巻第506号 2019年11月1日発行

編集・発行 人間文化研究機構 国立民族学博物館
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園 10-1
電話 06-6876-2151

発行人 園田直子
編集委員 南真木人(編集長) 上羽陽子 齋藤晃
菅瀬晶子 三島禎子 吉岡乾

デザイン 宮谷一欒 長岡綾子
制作・協力 一般財団法人千里文化財団
印刷 能登印刷株式会社

*本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報係にお願いします。
*本誌掲載記事の無断転載を禁じます。



交通案内

- 大阪モノレール「万博記念公園駅」・「公園東口駅」下車、徒歩約15分。
- 阪急茨木市駅・JR茨木駅から近鉄バスで「日本庭園前」下車、徒歩約13分。
- 乗用車は、公園内の「日本庭園前駐車場」(有料)から徒歩約5分。「日本庭園前ゲート」横にある当館専用通行口をお通じください。
- タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れてきます。

みんぱくホームページ

<http://www.minpaku.ac.jp/>

みんぱくフェイスブック

<https://www.facebook.com/MINPAKUofficial>

みんぱくツイッター

<https://twitter.com/MINPAKUofficial>

みんぱくインスタグラム

<https://www.instagram.com/MINPAKUofficial/>

みんぱくYouTube

<https://www.youtube.com/user/MINPAKUofficial>



みんなのほくぶつかん みんなぱく

MINPAKU

国立民族学博物館 巡回展・共催展のご紹介

*12~13頁もあわせてご覧ください。

国立民族学博物館 巡回展

特別展

子ども／おもちゃの博覧会

場所：埼玉県立歴史と民俗の博物館
会期：～11月24日（日）

いつの時代も、子どもたちとともにあった玩具。その時々々の社会や世相が映し出された玩具からは、人々が子どもに向けたまなざしがうかがえます。江戸時代から戦後のさまざまな玩具をととして、子どもをめぐる社会の移り変わりとその意味を探ります。



上：ロイド人形
左：汽車

国立民族学博物館 巡回展

サウジアラビア、オアシスに 生きる女性たちの50年

—「みられる私」より「みる私」

場所：横浜ユーラシア文化館
会期：～12月22日（日）

1960年代末、文化人類学者の片倉もとはサウジアラビア西部のオアシスの村で長期調査を行いました。それから半世紀後、関係者による同地での追跡調査が進められました。本展では、その最新の調査結果を交えながら、片倉が現地でも撮影した貴重な写真、色鮮やかな飾面や民族衣装、様々な生活道具を通して、サウジアラビア女性の生活世界の変遷をたどります。



香炉

国立民族学博物館 共催展

国立民族学博物館コレクション

世界のかわいい衣装

場所：阪急うめだ本店9階 阪急うめだギャラリー
会期：11月13日（水）～25日（月）

本展では、みんなぱくコレクションのなかから、「かわいい」をキーワードに選んだ、1920年代から現在までの衣装約120点が展示されます。世界各地で育まれてきた手仕事による豊かな色彩、地域独特の文様、形や着方の多様さを紹介します。

関連イベント

*詳細は決まり次第、本館ホームページに掲載いたします。

◆オープニングトークイベント（予定）

講師：上羽陽子（本館准教授、本展プロジェクト代表）
島本美由紀（料理研究家）

日程：11月13日（水）

◆ギャラリートーク（予定）

講師：上羽陽子ほかプロジェクト・メンバー
日程：11月16日（土）、19日（火）、20日（水）、
22日（金）、24日（日）



下衣
（ペルー）



上衣
（パナマ）



靴
（中国）